日本鉄道レッドリスト紀行

「第二話　三陸鉄道リアス線」

所属ゼミ：小説ゼミ1
学籍番号：52553026
氏　名：遊佐　康平

※文中、津波の襲来を想起させる表現があります。

＊

「あなたがいてくれるから、何度でも走りだせる。」

五年前に三陸の地で見かけた駅に貼られたポスターのメッセージに感じた強さの根源を知るために旅に出た。

【再び三陸へ】

山あいの無人駅の分岐を踏んで車体が軽く揺れ、窓から差し込む日射しに目を細めながら微睡みから目を覚ます。

日射しを受けた顔の火照りを冷まそうとペットボトルのお茶を一口含み車窓に目を移せば、今日は立冬であるにも関わらず、山中の木々は錦秋の彩りを残している。

新花巻駅で新幹線から乗り継いだＪＲ釜石線の「快速はまゆり１号」は終点の釜石を目指し北上山地のサミットを超えようとしている。

三両編成のキハ一一〇系気動車はローカル線では見慣れた型式だが、此の列車には特別に指定席車両もあり、そこにはリクライニングシートが騎られている。

しかし乗客は各車両三人程度で、特急としても用いられる性能を持て余したようにコロコロと静かなエンジン音を奏でゆるゆると走行している。

腕時計に目を遣り、時刻表アプリを立ち上げ釜石駅での三陸鉄道の宮古行への乗り継ぎを確認する。

また車窓をぼんやりと眺めながら、これから始まる三陸行に想いを馳せる。

『日本鉄道レッドリスト紀行』の第二話に岩手県のリアス式海岸を貫いて走る三陸鉄道を選んだ。

三陸鉄道リアス線は岩手県の大船渡市の盛駅と久慈市の久慈駅間、一六三キロをを結ぶ日本最長の第三セクターの路線である。

またＮＨＫの連続テレビ小説『あまちゃん』の中で登場する「北三陸鉄道」のモデルとして、今回触れる東日本大震災との関わりも含めて御存知の方もいるだろう。

五年前に此地を訪れた当時、筆者はネットの旅行記に「ド根性路線シリーズ」を掲載していた。

地方で逆境の中で、必死に存続のために必死に努力している路線を、当時ネットでブームになったアスファルトの割れ目から奇跡的に生育した「ド根性大根」になぞらえ上梓した中に三陸鉄道も含めていた。

三陸沿岸はかつて「陸の孤島」と呼ばれ、太古よりリアス式海岸の地形ゆえ、地震の度に甚大な被害を受けながら、交通アクセスが整備されず救援物資の流通が停滞し、その都度、地域住民は忸怩たる想いに苛まれてきた。

一九七〇年代にようやく国鉄が路線を敷設するが程なく廃止対象路線となったときに、存続を強く願う地元住民や行政・経済界が受け皿として設立した日本初の第三セクターの鉄道会社として発足したのがこの三陸鉄道なのである。

この地元の想いを受けて発足した三陸鉄道は二〇一一年の東日本大震災時においても、被災者の救済・復興の為に尽力した。

全線において壊滅的な被害を受けつつも、五日後には可能な区間で運行を再開し、被災者を無料で運んだ。

そして津波で破壊された線路や駅舎を、少しずつ作り直し、三年余を掛けて復旧させた。

当時、釜石と宮古の間はＪＲ山田線の区間であったが、ＪＲはバス路線（ＢＲＴ）化での復旧を提案するが、バス路線では自分たちの思う復興ができないとの住民の想いを汲んで、二〇一九年にこの区間も自社路線として併合し現在の形となる。

しかしその年の十月、台風十九号は路線の七割に運行不能のダメージを与えた。

筆者が前回この路線を訪れたのは、台風の被災から半年を掛けて全線復旧した直後であった。

ローカル路線の維持のために厳しい環境で地域ぐるみで取り組んでいる所は多々あるが、並外れて強い想いを持ち続けている三陸鉄道に対する地域の人々の想いに触れて見たいと思った。

「なぜ、三陸鉄道は何があっても何度でも走り出すのだろう…」

【一日目　釜石駅から】

「快速はまゆり」は定時に釜石駅の三番線ホームに滑り込む。

向かい側の四番線には久慈行の三陸鉄道の宮古行の下り列車が静かに発車を待っている。

白地に青と赤のストライプを巻いた車両の二両編成の車両。

白はこの地の雪と海原に立つ白波、青は三陸の青い海、赤は情熱を表しているそうだ。

進行方向右側のボックスシートに陣取ると、程なく団体のツアー客が大挙して乗り込ん

できて、しんとした車内は一転して賑やかになる。
六十代と思しき女性三人組が話しかけてくる。
「ねえ、景色がいいのはどっちかしら？」
「海が見たいのなら、こちら側ですね。」と答える。
「じゃあ、失礼しまーす。」と四人掛けのボックスシートが埋まる。
一人が筆者の膝の上に置いたライカのミラーレス一眼を指押さして「良いカメラね、ねえ、撮り鉄？」と尋ねてくる。
「いや、どちらかと言うと乗り鉄で…。」
「そうなの？今まで乗った中でお薦めの路線はどこ？」
それをきっかけに三人組と旅談義が始まる。
彼女たちは学生時代からの仲の良い三人組で、仕事をリタイヤしてからは一緒に団体旅行を楽しんでいるとのこと。
今回の様にパックツアーでも体験乗車的に鉄道に乗って、こうして知らない人と交流できるは楽しいという。
求めに応じて彼女達と一緒に記念写真に収まった後に、今回の三陸旅行のお目当てを問うとリーダー格の女性は「紅葉と青い海を両方楽しみたかった。」
もう一人は「私は食、三陸は海のものが美味しいでしょ、今夜は陸中山田に泊まるの、どこか良い店ある？」
最後の一人はもじもじしながら「マニアックなんだけど…ラグビースタジアムを車窓からでもいいから見たいの、W杯の。」
「それなら次の駅（鵜住居（うのすまい））で車窓の右側に見えますよ。二分停車なのでホームから見られては？」と言うと、スマートフォンを持って通路を駆け出していった。
今回の旅行中、何度も団体客の体験乗車に遭遇した。
この鉄道は過疎化の中、住民の運賃収入だけでは路線維持が難しく、団体旅行客の誘致や企画列車の運行に活路を求めている。
三陸鉄道が公表している二〇二四年度の財務諸表によると運賃収入のうち、半分以上は観光客に依るものである。
三人からは三陸の旅を存分に楽しんでいることを見て取ることができ、この地の風土や環境がこの路線の大切な資産であることを感じた。
ツアー客は陸中山田駅で下車し、三人組は改札口から手を振って送ってくれた。

【宮古市田老（たろう）へ】

先程までの喧噪が嘘のように車内にしんとした静けさが訪れる。
ふと車内を見渡せば、乗客は自分ひとりであり、山側の窓から午後の柔らかな日射しが差し込んでいる。
終着の宮古で更に北上する久慈行に乗り換え、今日の目的地、田老に向かう。
田老駅は高架の上にぽつんと小さな待合室だけのある無人駅である。
ホームから海の方を見やると遥か向こうに大規模な防潮堤があり、そこから目の前まで

は太陽光発電パネル以外の構築物はない。
震災前にこの駅に降り立った時は、この駅には観光センターを兼ねた二階建ての鉄筋コンクリート造の立派な駅舎があって、駅前には大きな集落には商店街があり、学校や市役所の支所もあった。
この地を訪れ、昭和を感じさせる懐かしさのある街中を散策した記憶がまるで幻だったように、自分の中で現実感を失っていく。
あの日、三月十一日にこの地を十七メートルの津波が襲ったことも、住民はこの地での復興を諦め、別の所に移住したことも知識としては知っていたが、目の前の光景と過去の想い出をリンクさせることはできない。
ホームから階段で下に降りることができるが、なぜかそれが躊躇われ、ホームで次の列車を待った。
一駅先の新田老駅は田老の住民が移ってきた集落にあり、その時に新設された駅である。
ここも高架にある駅だが、ホームは真新しい三階建ての市役所の支所の三階のホールに直結していて、この建物には他に商工会議所や信用金庫の支店も併設されている。
小綺麗なホールにある掲示板に目をやると、地域のマップには震災を伝承するものとして、徒歩圏に宮古市の災害復興伝承館と「津波てんでんこの石碑」なるものがあることが記載されてあり、この二箇所を訪れることとした。
エレベータで一階に降りて、外に出ると裏手には小学校があり、校庭では子ども達が野球の練習に励んでいる。
岩手は大谷翔平を生んだ地であり、彼らも偉大な先輩に続こうと野球に夢を追っているのかな、などと思いを巡らせ傍らを通り過ぎる。
周囲はかつての田老の集落ほどの規模ではないが、真新しい建物が一定の間隔を保ちながら集落を形成している。
程なく宮古市震災復興伝承館に到着し、中に入り掃除をしていた女性の職員に会釈して入っていくと「いらっしゃい、丁度今団体さんが帰ったとこ、お客さんだけだからごゆっくり。」と招き入れられる。
中に入ると震災の模様と復興の歩みを示すパネルの他、当時の津波の襲来や、被害の模様を移した動画も見せるコーナーもある。
動画の中には津波襲来後の田老駅前の状況を写したものもあった。
津波の襲来を受けながらもかろうじて原形を留めた見覚えのある駅舎、駅前には粉砕された家屋、車、船舶等の膨大な瓦礫が積み上がっていた。
その映像を見て先ほど現地では感じられなかった震災前の記憶がなぜか鮮明に蘇る。
「二十年前、自分は確かにあの駅前にいた。街並みを巡って、この街の人々の営みに触れていたんだ。」
自分の中で懐古の気持ちと知りたくない現実に触れた後悔が入り交じった。
目眩を感じたような気分で建物を出ると、石碑のあるという中学校を目指して歩く、目指す右手には大きな防潮堤が偉容を誇っている。
田老は今まで何度も津波の襲来を受け、その都度対策を講じてきた。
この防潮堤も建設時は余所から立派すぎるという揶揄を込めて「万里の長城」と言われてきた。

しかし、二〇一一年の津波はその「万里の長城」を易々と超えて、再びこの地域に甚大な被害を与えた。

これから訪れる石碑に刻まれる「津波てんでんこ」はそれでも苦難を乗り越え、この地に生きていく住民につたわる災害に関する伝承である。

津波が来たら、傍らに家族や友人がいても自分の避難を最優先しろ、構わず逃げろという教えである。

自分は今日はじめてこの言葉を新田老駅のマップで知った。

決して利己主義的な考えではなく、相互信頼の元に各人が生き残ることに全力を尽くすことで被害を最小限に食い止めるとともに、津波の度に一定の人的被害を覚悟しなければならない土地の人にとって、「俺もあいつもベストを尽くしたんだ。」と納得するためのものでもあるらしい。

しばらく歩いた中学校の校門の傍らにその石碑はあった。

「防浪堤　あっても逃げろ　高台へ　津波が来たら　てんでんこ」（原文ママ）

石碑の裏には二〇一五年にこの中学校の女子生徒が記した旨が記されている。

いにしえより伝わる伝承は、今も若い世代にも伝え続けされていることに感慨を抱く。

「てんでんこの石碑見てんの？」

背後の声に振り向くと、四〇代と思しき女性が小学生と思われる男の子を連れて立っていた。

「今でもこの言い伝えは生きているんですか？」と問うと

「ああ、うん、私は震災のちょっと前に嫁いできたんだけどねぇ、あの時は警報鳴ったらうちの旦那も、舅も私に目もくれないで一目散に逃げ出してね、あとで咎めたら『なあに、てんでんこだ』って、当時はここにきたばっかりで意味わかんなかったんですけどね。」と苦笑しながら話してくれた。

新田老の駅まで戻り、暮れなずむホームで本日の宿となる釜石行の列車を待つ、裏手の小学校の校庭にオルゴールが鳴り、未来の大谷翔平達はそれを合図にグラウンドに一礼して家路につく。

疎らな町並みにぽつりぽつりと明かりが灯り、ホームに山から吹き下ろす風が肌を刺すようになった頃、遠くからコトンコトンと列車が線路の継ぎ目を踏む音が聞こえ、前照灯が近づいてくるのを、ほっとした想いで見ていた。

【二日目　田野畑村羅賀（たのはたらが）】

翌日、宿泊先の釜石駅に隣接するホテルのエントランスから一歩踏み出すと、北国の朝の冷気に眠気を吹き飛ばされた。

快晴の青空を見上げながら、「うん」と伸びをして改札を通りホームに上がると七時五〇分発の久慈行の気動車がコロコロとアイドリングの音を響かせていた。

車内に入ると今日は土曜日であるせいか、乗客は観光客と思しき人が疎らにあるだけで通勤通学客の姿はいない。

今日はこれから田野畑駅まで乗車し、地元の震災の記憶を伝承している方から当時の様

子を伺う予定である。
今回は拠点となるホテルを釜石に定めたが、ここから田野畑までは約二時間二十分の旅である。
「新幹線で言えば、京都の用事に備えて東京に前泊するようなものだな。」そう独りごちて苦笑する。
休日の朝の穏やかな日射しの刺す海岸沿いを、疎らに乗客を乗せ、そして降ろしながらゆるゆると列車は進んでいく。
リアス式海岸の形成する入り江には長大な防潮堤が連なり、時折光り輝く穏やかな海原を垣間見ることができる。
そして駅間のほとんどには長いトンネルがあった。
複雑な形をした海岸線を直線的に線路が貫貫いているため、畢竟そのような構造になるのだが、この構造によって津波の直撃による被害を免れた部分も多いのではと想像する。
震災当日、トンネルの中で列車を停止させ、津波をやり過ごし、救助が来るまで乗客を守り、その後社員が車で避難所まで送り届けたという逸話も聞いたことがある。

田野畑駅は目前に大きな防潮堤を控えたところにある海沿いの駅である。
田野畑村の名前を背負った中心駅であるが、周囲に集落らしきものはない。
この駅を訪れたのも五年ぶりである。
出口で今日のコーディネイトをお願いした地元のＮＰＯ法人の職員であるＸさんが迎えてくれ、軽ワゴンで待ち合わせ場所の漁港に向かう。
羅賀という集落の漁港で今日お話を伺うＳさんと合流する。
Ｓさんは一九四一年（昭和一六年）生まれの八四歳、小柄だが背筋はすっと伸び、話す口調は快活である。
温和な表情と理知的な印象のメタルフレームの眼鏡をかけたその様は優しい校長先生と言った印象である。
若いときは遠洋漁業に従事し、今でもサッパ船というボートに船外機を付けたような小型の漁船で漁にでるそうだ。
「羅賀という地名の由来はアイヌ語の『ラ・ガ』から来ています。これは目の前の景色のとおり『坂の下の海』という意味です。」
Ｓさんは先ず地名の由来から語り始め、港のすぐ後ろにある堤防状の地形を指さすと、高さ二〇メートルはあるであろうその高台は人が造った堤防ではなく自然が造作したものだそうである。
そしてその高台の上に自分たちの住む集落があるという。
海の方に向き直ると「目の前に観光ホテルがあるでしょう？。五階建てと一〇階建ての二棟のうち、五階建ての部分は二〇メートル以上あります。津波はその高さを楽々と超えてきました。」
その日、観光ホテルには団体客が宿泊しており、ホテルは団体客をバスで高台に避難させた後、ホテルに戻り高層階に避難して津波を凌いだという。
次に堤の階段を昇り高台の上に向かう、Ｓさんの足取りは軽く、そして追いつけないほど速い。

目前にある集落を示しながら静かな口調で話す。
「ここが羅賀の集落です。前半分が空き地になっているでしょう、これは家屋が流された跡です。そこには家を建てないようにしています。」
津波は二〇メートルの堤を超え、集落の半分を流し去ってしまった。
「震災前、この集落には一六〇人の住民が住んでいて、そのうち七名が亡くなりました。その全てが若い世代の人たちでした。彼らは逃げなかったんです。」
Sさんは海の彼方を遠い目で見ながら、当日此地であったことを話し始める。
「あの日は良い天気で海は穏やかでした。水面はさざ波ひとつなく静かでした。」
地元では水面が鏡面のように穏やかな状態を「鏡凪ぎ」という、当日はまさに鏡凪ぎだったそうだ。
一四時四六分、東日本一帯を激しい揺れが襲う。
「あの時地震の揺れを意識することは特にありませんでした。この地の震度は四だったんです。」
しばらくして防災無線が「大津波警報」が発令されたことを伝える。
「高台にある自宅から海を見ていました。そうしたら岸に近いところで急に海面が盛り上がって、数メートルの高さの第一波が襲ってきたんです。」 昔からこの集落を津波から守ってきた自然の堤防はこの津波を受け止め、集落を襲うには至らなかった。
「助かったと思いました。これで収まったと思いました。しかし第二波以降に備えて、海を見張り続けました。」
そしてその少し後に第二波は二〇メートル以上の高さでこの集落に向かってきた。
「その時、何を思われましたか？」と問うと、沖合を見つめたまま「綺麗だと思いました。」とポツリと答えた。
「綺麗？」
「はい、あれ程美しいものを見たことはありませんでした。」
この集落の半分を消し去ることになる第二波の高さ二〇メートルを超える波の壁は青く透き通って日の光を浴びてキラキラと煌めいていた。
現実のものとして受け止めることのできる範囲を遥かに超越した津波に対する感慨はそれだけだったそうである。
しかし、その津波が先述の観光ホテルの五階部分を超えてくるのを目の当たりにしてSさんは「まずい！」と我に返る。
それは津波の高さが二〇メートルを超えており、高台を超えて集落に到達することを意味していた。
「背後の山の中腹にある神社に、集落の皆で駆け上がりました。」
坂を駆け上がって神社に辿りついたSさんはじめ集落の人々の目前で、大津波は集落の半分を押し流し、膨大な量の瓦礫で集落を詰め尽くした。
程なく冷え込む夜がやってくる。
神社の社務所には寄り合いの時に使う三台の石油ストーブと四〇リットルの灯油があり、暖を取りながら一夜を過ごしたという。
「朝を迎えて下に降りていったとき、瓦礫が全ての道を埋め尽くし、孤立していることを知りました。集落には九〇歳の女性一人と〇歳の赤ちゃんが二人いて、これだけはなんと

しても外の避難所に移さなければと思いました。」
集落から救助を要請する術はなかったが、行政や消防団はこの状況を把握していて、二日ほどで外部への脱出路を確保してくれたという。
「あれが私の家です。」
Sさんがそう言って指差す先の家は残った集落の最前列にあった。
斜面地にある集落なので、各々の家の基礎の前面は石垣の様になっている。
「前に建つ家との高さの差は三メートルあります。その差が明暗を分けたのです。自宅から前にあった家は全部流されてしまったんです。」と絞り出すような声で話す。
「昨日、『てんでんこ』の伝承に触れました。田老では中学生によって伝承されている様子も見てきました。しかし、ここでは若い人が避難せず亡くなったと言う、この地域には同じような伝承はなかったのでしょうか」と問う。
Sさんは深く呼吸をしてからゆっくりと答えた。
「言葉は違うがそういう伝承はありました。しかし若い世代に伝えていなかった。今となっては伝えるべきだったと思います。」
「なぜ？」という問いの言葉を選んでいた筆者の想いを察したのか、一拍間を置いたあと「大丈夫だと思っていたんです。この高台はあの昭和八年（一九三三年）の津波に耐えた。あれより大きな津波など来る訳がないと思っていました。」
三陸は有史以来、数十年ごとに大きな津波の被害を受けてきた。
一八九六年（明治二九年）六月一五日未明に起きた地震は震度こそ現在の基準で二から三だったものの、襲来した津波の高さは四〇メートルに迫り、約二二〇〇〇人の死者・行方不明者を出した。
その三七年後、一九三三年三月三日未明、マグニチュード八・一の地震による津波が再度三陸を襲い、死者・行方不明者約三〇〇〇人、負傷は一二〇〇〇人以上という被害をもたらす。
Sさんの言う昭和八年の津波は、これを指している。
先の地震より大規模であったが、被害が少ないのは明治の津波によって、避難の心得が浸透していたからと言われる。
Sさんの生まれる前に起きたことであるが、両親などから当時の模様を聞いていたのだろう。
人は実際に体験したり、肉親から伝承されたものを超える事態を想定するのは難しい、今回訪れた各地でそれを痛感した。
まもなく約束した時間となり、最後の質問を投げかける。
「私の住んでいる福島県は津波より放射能の影響を強く受けました。原発周辺の建物の倒壊はほとんどなく、一四年前の街並みがそのまま残っている。しかし今、そこに住む人は誰もいない。立入制限は解除されたが戻ってくることもないでしょう。しかしここで家を流された方は、集落内の高台に家を移転して住み続けている。これは住民の方がこの豊かな海の恵みやこの地域に大きな魅力を感じているからでしょうか？」
Sさんは深く頷きながら「そうです、私は長くこの地で海から恵みを得ることを生業としてきました。そしてこの集落の共に暮らす住人の多くは私の親族です。生き方を変えて他の所に住むことは想像もできません。」そう答えて温和な笑みを浮かべた。

Sさんに謝意を表して、Xさんの運転する軽ワゴンに乗り込む。
運転席でXさんは「お疲れ様でした、じゃあ駅に…」と言いかけて思い直したように、「遊佐さん、列車の時間までまだあります。北山崎を見てから帰りませんか？私は現地で失礼しますが帰りの足は手配しておきます。」と尋ねてきた。
北山崎はリアス式海岸の断崖の景色が美しい田野畑村にある三陸海岸有数の景勝地である。
Xさんはこの海岸の苛烈な過去だけでなく、小春日和の今日の美しさも見てほしいと思っているのかと推量した。もしかしたら筆者に「お前は見るべきだ」と諭しているのかも知れない。
バックミラー越しにこちらを見ているXさんに「はい、お願いします。」と答えると軽ワゴンは走り出す。
駐車場の出口でSさんがこちらに笑みを浮かべながら帽子を振っていた。

【最終日　大槌町】

今回の三陸行の最終日に大槌（おおつち）町を選んだのは、この地が単に大きな被害を受けたからと言うわけではない。五年前初めて此地を訪れたとき、過去の悲劇から立ち上がり、前に進む力強さを感じたからだ。
五年ぶりに降り立った大槌駅は、変わらず綺麗で明るい雰囲気に満ちていた。
白を基調とした小綺麗な駅舎は上から見ると瓢箪の形をしており、駅のそこここにはNHKで放映された人形劇『ひょっこりひょうたん島』のキャラクターのオブジェがおどけた表情で来訪者を迎える。
大槌町の湾内にある蓬莱島という小島がひょうたんの形をしており、『ひょっこりひょうたん島』のモデルの一つとされていることに由来する。
現時点では特に観光と結びつける対応はしていないが、町のイメージキャラクターとして復興をアピールしている。
前回来訪時、震災時に苛烈な悲劇があったこの町でのこの取り組みに哀しみを乗り越えて明るく前に進む姿勢を感じ、その想いに共感した。それ故にあの日この町で何があったのか知りたいと思い、今回改めてここを訪れた。
話を伺うIさんとは一四時の待ち合わせだが、その前に一人で街並みを散策するため、お昼前に現地入りした。
昼食を済ませ街並みを歩く。駅の東側（海側）は警戒区域となっており、一切の構築物はない。
西側には、立て直された真新しい家屋が並ぶ。三陸沿岸を訪れるといつも思うのだが、新しい家屋が一定の間隔を保って集落を形成していると、海外のこざっぱりとした理想的な新興住宅地に見えてしまう。
もちろん津波が住民の命や財産を押しつぶし、その後復興された集落に戻らない人が多いためであるが、新しい街並みは明るく開放的で瀟洒なたたずまいを見せている。
正午になると防災無線からは『ひょっこりひょうたん島』のオープニングテーマのオ

ルゴールが流れる。
　静寂を破って愉快なメロディが街中に響き渡るが、気の所為かそれは少し憂いを秘めたものにも聞こえた。
『苦しいこともあるだろさ　悲しいこともあるだろさ　だけどボクらはくじけない　泣くのはいやだ　笑っちゃお　進め！』
（『ひょっこりひょうたん島』オープニングテーマより一部引用、
作詞　井上ひさし、山元譲久）
町の中心部にある大槌町文化交流センターで、今日話を伺うＩさんと合流する。
Ｉさんは筆者と同世代の小柄な女性、竹を割ったような快活な印象で笑顔が魅力的だ。センター内には震災のパネル展示があり、山の斜面に人々が避難しており、その下は津波の濁流が渦巻いている写真があった。
Ｉさんは「これからここに行きますから、この写真をよく覚えておいてくださいね。」と話した。
Ｉさんの運転する車で町内の江岸寺という寺の境内に移動する。
先程パネルで見た山腹の墓地が見える、その斜面の下にある境内でＩさんの話を伺うと先程のパネルを見た自分の認識が誤っていることに気づく。
市が指定した避難場所は今自分たちが立っている位置で、あの濁流が渦巻いていた場所だった。
墓地で辛くも難を逃れた方は、たまたまそこに登っていた少数の人との説明を受けた。
Ｉさんは海の方を指差し、「ここから海は見えないでしょ、ここには数百人が避難していたと思います。そのほとんどの人は津波が来るのを知ることはなかったと思う。」そう教えられ、海の方を見やると確かに街並みと防潮堤に阻まれ水面を見ることはできなかった。
ここに避難した人々の多くは瓦礫の下敷きになり、その瓦礫に船や車の燃料が流れ込んで発火し、周囲は火の海になったそうだ。
「この街の被害者で行方不明の割合が多いのはその所為もあると思います。」と教えてくれた。
境内の隅には当時寺にあった梵鐘がうち捨てられた廃棄物のように転がっていた。
それはぐにゃりと熱で溶けた跡があり、割れていくつかの破片となっていた。
墓地のある山の頂上にある城山公園に車で移動する。
公園までは、曲がりくねった急勾配をかなりの距離を登らなければならない。
頂上について眼下の墓地を見下ろすと、ここにいたる石段も急で段数もかなり多い。
子どもや高齢者の避難にはかなり苦労したようだ。麓の火の海はやがてこの斜面を這い上がっていき、住民は更に奥地に避難を余儀なくされたそうだ。
「ここからは、沖合が見えないでしょう？」と海の方向を指差して言う。
湾の入口で二つの半島が重なって目隠しをするような形で視界を塞いでおり、確かにその光景は湖のようである。
「だから遠くから津波が襲来することが見えなかったんです。丘にあがった津波は土煙を立てて全てを押し潰しながら市街地を駆け上がっていった。避難した人たちはその土煙が自分たちを襲う津波だということを理解できなかったんです。」
そう話すＩさんの声は少し震えていたように感じた。

当日の避難の様子を「てんでんこ」の伝承は活かされたかも含めて伺う。
当日、学校に行っていた児童は素早く高台に避難して全員無事だったそうだ。
「ただ、あの時インフルエンザが流行っていて、自宅で休んでいた子ども達の多くは巻き込まれてしまったんです。」
続けて「この土地は高齢者の意見が強いんです。避難する必要はないという高齢者の意見に押されて避難しなかった家が少なくなかったんです。」
「どうしてそんなことが？」と問うと、「昭和八年の津波の時の伝承が大きいですね。これしきの地震で避難することはないという意識が年長者にはあって。」
過去の経験の範囲内での想定という羅賀の集落と同じ状況がここにもあった。
「あとは高齢化です。寝たきりの家族を置いて逃げることは躊躇われ、戻って巻き込まれた人も多いです。」
続いてかつて大槌町役場があった跡地に案内してもらう。
そこは有り触れたがらんとした空き地で、冬の夕暮れが辺りをオレンジ色に染めている。付近の住民が空き地を散歩をする姿があり、飼い主に連れられた大きな秋田犬が構って欲しそうに屈託のない笑みでこちらを見ている。
目の前には高さ一四メートルの防潮堤が聳えている。
Ｉさんが口を開く「ここからは防潮堤で海が見えないですよね。そのすぐ前、当時の役場の前庭に町長を始め町の幹部職員が災害対策本部を設置して、津波が来ていることに気づかないまま飲み込まれてしまったんです。」
役場の被害はこれだけではない。
火の見櫓のような監視所にいた職員も津波に巻き込まれた。この監視所の屋根に登った数名は助かったが、そこに登るには簡素なかすがい状の足場があるのみで上から引き上げ、下から押し上げないと上がれない構造だったそうだ。他にも各地の状況を見に行って亡くなった職員もいた一方で、命あってのものだねと逃げた職員もいたそうだ。
以前からこの役場を襲った悲劇を聞いて、かつて行政に携わったものとして、自分がその立場だったらどうするのか、此の地に立ったら何を思うのかと思っていたが、伺った話の内容に何も結論を出すことは出来ず、心の中で黙祷してこの場を去った。
次に漁村である赤浜の集落を訪ねる、ここは他の地区より防潮堤の高さは六メーター前後とかなり低い。
「他の地区と同じ高さに防潮堤を嵩上げする議論はあったんです。でも漁師にとって朝に海を見ることができないことへの懸念があって…一度は拒否して、結局はやはり嵩上げしてほしいと覆ったんですが、国からの交付金の申請期限が過ぎてしまって。」
結局集落を津波が回避でき、海が見渡せる高台に移転することで落ち着いたそうだ。
「防潮堤の高さをどうするか、どれくらいの高さの高台に移転するか、結局想定する基準は東日本大震災の規模を超えることはないんです。これを超える津波がきたら、また…」
集落が移転した高台から海を見下ろしながらＩさんはぽつりと言った。

【大槌駅にて】

日が山の端に沈み、大槌の街並みが群青色に染まり、Ｉさんの運転で駅に戻る。
車中、今回の旅を振り返る。
「津波てんでんこ」今回知ったこの言葉は究極の自助のようで、実は強い共助の精神に由来するものだと感じた。
三陸という、地理的に過去に公助を受けづらい場所であったことに加え、津波による被害を受け続けてきた此地に暮らす人にとって、危機的状況にあっては各人が生きることに全力を尽くし、そしてお互いに助け合う精神の土壌が培われてきたのだろう。
三陸鉄道は過去の津波災害時に「ここに鉄道があれば」という思いを受けてできた路線であり、不採算により廃止対象となっても、此地に鉄道インフラは必要だという地元の気持ちが三陸鉄道という希有な強さを持った鉄道会社を生んだ、そして現在、駅舎と防災センターの併設や、高台のホームを避難場所にするなど地元の復興計画や災害時の対応だけでなく、観光客誘致など地域振興にも明確な役割を持っており、地域の人々にとって欠くことのできない存在になっている。
「何としてもこの街で暮らしたい。」という強い想いが、古来からの自助と共助の意識と結びつき、この鉄道を支えているということをこの旅の結論とした。

まだ午後五時前だが冬の夕暮れは早く、大槌駅はすっかり宵闇の中にあった。
駐車場でＩさんに礼を述べると、Ｉさんは「頑張って書いてください。書けたら読ませてくださいね。そしてまた大槌に来てね。」と右手を差し出す。
握手に応じながら「ええ、きっと。」と応えると
Ｉさんは「うん」と左手を添えて力強く握りしめて、「じゃあね」と言い、踵を返した。
待合室には煌々と灯りが灯り、列車を待つ一人の高校生が静かにスマートフォンに目を落としている。
少し離れたベンチに座り、時刻表アプリを立ち上げ、帰りの経路を確認する。
宮古で盛岡行の最終の急行バスに乗り、新幹線と在来線を乗り継げば、福島県に在る自宅の最寄駅には二三時〇四分着と出る。
「六時間か、やっぱり三陸は遠いな」と呟き、窓から夜空を見上げると、宵の明星が寒空に輝いていた。

（了）

訪問日　二〇二五年一一月七～九日
一一月二一～二二日

東日本大震災で犠牲となられた皆様のご冥福を心よりお祈りします。
震災の悲しみと苦しさを乗り越えて前に進み続ける皆様に共感と心からの敬意を表します。
今回の取材にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

防浪堤 あっても逃げろ 高台へ
津波が来たら てんでんこ

あなたがいてくれるから、
何度でも走り出せる。
復旧までどのくらいかかるんだろう。
そんな不安を抱きながら、列車の来ない線路を歩いていたとき。
「走り出すのが楽しみだね」
「また乗りたいな」
沿線のお客様が、いつも声をかけてくれました。
今度は、私たちの番。
毎日新しくなるこの場所で生きる方々と、日本中の方々をつなぎたい。
誰かの力になれるような鉄道になりたい。
お客様がいる限り、私たちは走り続けます。
3.20 三陸鉄道リアス線、全線運行再開。
三鉄2020